私の源氏物語

村山リウ

検印廃止

私の源氏物語

昭和五十二年一月二十日　第一刷
昭和五十二年二月一日　第二刷

著者　村山リウ
発行者　浅沼博
印刷　㈱三和印刷
製本　㈱明泉堂
発行所　日本放送出版協会
郵便番号一五〇
東京都渋谷区宇田川町四一一一
（落丁本・乱丁本はお取替いたします）

© 1977 Ryu Murayama

〈写真提供〉

源氏物語車争い図屏風　東京国立博物館
平治物語絵巻　東京国立博物館
源氏物語屏風　澪標　静嘉堂文庫
源氏物語絵巻　東屋(一)　徳川黎明会
蓬生……69
柏木(一)……98
柏木(三)……100
宿木(三)……139
橋姫……129
東屋(二)……148
源氏物語絵巻　夕霧……29　五島美術館
御法……103

〈写真撮影〉

岡村　又一
菅原　苓子

私の源氏物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめに

この『私の源氏物語』は昭和五十年六月一日から、五日間、午後二時からのＮＨＫ「女性手帳」で放送したものに、少し説明を加えたものです。

「放送」と字の如く、送りっぱなしのもので、あとに形を残さぬのが当り前のことですのに、日本放送出版協会の水谷様はじめ、関係の方々の御世話になって、活字になって残りますことは、何というしあわせかと、まずお礼申し上げます。

葵祭が近くなったな、と思っていた頃、ＮＨＫ近畿本部の福田雅子ディレクターから話しかけられ、それではまずというので、カメラマンの岡村又一さん、アナウンサーの向後英紀さんを加えて、京都へ走り、御所、上賀茂神社と撮影にとりかかり、続いて嵯峨野、野宮、雨あがりの翌日は、吉田正信カメラマンが、十六ミリに宇治を収めて下さることになりました。おかげで静と動とのすばらしい対比を、宇治川の急流を中心に、たっぷり画面に浮き出させることになりました。

ラジオと違い、みなさまの温いお心と、美事なチームワークのおかげで、まことに

楽しく放送に取り組ませて頂きましたし、絵や写真が、京都の優雅な自然ととけあった王朝の雰囲気をもりあげてくれますので、つたない話も何とか破綻をみないですませることが出来ました。

向後、福田康子両アナウンサーが、茶の間でおばあさんにものをきいて下さるみたいに親しく語りかけて下さるので、甘えて、つい、老いのひとり語りになってしまったことを恥しく存じます。

なおNHK女性手帳『私の源氏物語』の放送が、後に昭和五十年度の放送文化基金賞をいただきました。この番組の制作にたずさわった方々とともに、私も心からうれしく存じております。

みなさま本当に有難うございました。

昭和五十一年　秋

村山リウ

私の源氏物語・目次

はじめに……1
第一章　源氏物語をかたる……11
『源氏』を音読する
人生と『源氏物語』
『源氏物語』との出会い
第二章　映えあいの文学……35
映えあいということ
「葵祭」の車争い　仏心と煩悩
男と女の映えあい
第三章　愛のかたち……59
藤壷への憧憬　末摘花
朧月夜の君　明石君　玉鬘
女三宮と紫上

目　次

第四章　女人像から……107
さまざまな女性美のかたち
「はかなさ」の美
「をかし」と「あはれ」の美
大君　中君　浮舟
第五章　劇作家　紫式部……161
物語の舞台　巧みな舞台づくり
科学者の眼のように
人間の真実を求めて
あとがき……185

装幀　米谷誠一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　源氏物語をかたる

『源氏』を音読する

いづれの御時にか、女御、更衣、あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

初よりわれはと思ひあがり給へる御かたがた、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ。同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。

朝夕の宮仕へにつけても、人の心を動かし恨みを負ふ積にやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かず哀なるものに思ほして、人の譏りをも、え憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。

どの帝の御代でありましたか。女御さま、更衣さまと呼ばれる、たくさんなお后が、奉仕しておいでのなかに、たいへん高貴な家柄の出ではないお方が、帝の寵愛を、一身に受けておいでした。

『源氏物語』は、こう書きはじめられています。

その頃の常識では、身分家柄が何人の場合でもまずものをいいます。愛情までが、身分序列に正比例する、と考えられていた時代ですから、宮家や、大臣家のような、最高貴族の出なら、どれほどの寵愛を受けようと、それは当然のこと。中流貴族の出身である更衣に、格別の愛情をお示しになるので、身分の高いお方が、露骨な嫉妬をし、いやがらせばかりするのでした。

と、話しかけて来るような形で、物語は書き続けられています。

――声に出して読んでいらっしゃるのをきいていると、やわらかく、うっとりした気分をさそわれますね。

だまって目で字を追うよりも、声に出して読んでみて、なるほどと思ったのです。と申しますのは、昔は印刷なんてありませんから、読みたい人は写し書きするしかありませんよね。ところがあの平安朝の頃は、紙は貴重品ですよね、ですから写し書きした人から、借りて来て、誰かが読み、あと数人が聞き手になったのです。一ときに幾人かが物語を知ることが出来たわけです。

したがって音読した方が、ぴったりするのです。ことに女が語り、女が聞くに適した、呼吸づかいや、計算された見事なリズムがこの文章のなかにあります。

――『源氏物語』は読んでみたいのですが、五十四帖ときいただけで、長い小説だなあと思ってしまって、よく「須磨」から先へ進めないなどと申しますが、音読をきいていますと、『源氏物語』を読む別なたのしさもあるようですね。

黙読するとおろそかになるような言葉や、この仮名を上につけるのか、下に用いるのかわからない場合なども、極く自然に理解することが出来ますし、テレビを見ているように一コマが短いのです。場面の転換がありますから。

といって、センテンスが長く、どこで段落があるのかと、呼吸が続かなくなるほど、追いかけなければならないところもありますよ。そんな場面は、事柄がこんがらがって、緒が見つからないとか、思いがわだかまっているのですから、読み手は、オペラのアリアのような感情になり、内容と表現との素晴しい合致を、体が感じることさえあります。

――読み方の調子が、私たちのことばと少しちがうように感じますが。

ごもっとも。私は西国の生まれで、上方暮らしですから、上方なまりがぬけません、そのせいかと思います。しかし、私はあえて上方なまりのまま、読むことにしています。『源氏物語』は京都で、一千年前通用した、知識人の間の言葉ですし、女言

葉で書かれていますから、上方のアクセントで音読すると、原典のなめらかな表現、やわらかい雰囲気を生かすことが出来ると思いまして。現代文と比べるとセンテンスが長いので、男性方だと節でもつけないと、あれだけの呼吸の長さは、むづかしいかもしれませんね。

物語に話を戻しましょう。

さっきの更衣ですが——

畏き御蔭をば、頼み聞えながら、貶しめ疵を求め給ふ人は多く、わが身はかよわく、物はかなきありさまにて、なか〳〵なる物思ひをぞし給ふ。

とあるように、帝お一方の愛情をたよりに、孤立して暮らしております。体も弱く、そのうえ未亡人家庭ですから、何かと物入りの多い宮中の交際では、経済上の心配の多いことだったのです。

前の世にも、御契や深かりけむ、世になく清らなる、玉の男御子さへ生れ給ひぬ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.